

北海道有形文化財・にしん漁場建築

小樽市鯉御殿は、1958年(昭和33年)北海道炭^{たん}鉱^{こう}汽船^{きせん}株式会社^{しやこたん とまりむら}が積丹の泊村にあった鯉漁場建築物を解体して、この地に移設し、その後小樽市に寄贈されたもので、1960年(昭和35年)5月31日「北海道有形文化財・にしん漁場建築」として、本道の民家ではじめて文化財に指定されました。屋内には、鯉漁や鯉加工に使われた道具類をはじめ、鯉番屋で生活していた人々の生活用具や写真などを展示しております。

建物の由来

積丹半島を中心とした日本海沿岸地域で、かつて鯉漁全盛の頃（網をひと起こし千両万両と言われた明治、大正時代）に、数多くの豪勢な鯉漁舎が建築されました。この建物は、その中の元屋のひとつで、泊村の鯉親方、田中福松氏が1891年（明治24年）から7年をかけて1897年（明治30年）に竣工したものです。現存する建物の中では、大規模であり、かつ明治時代の原形をとどめており華やかな往時^{しの}を偲ぶ貴重な鯉漁場建築であります。



▲当時使用された道具類

当時の漁業状況

本来、この建物の立地は、崖を背負う波打ち際^{あみくら}にあり、海岸に張りつくように鯉場特有の漁舎である網倉、倉庫など数棟が建てられておりました。この田中漁場の全盛期には120人位の漁夫がここに寝泊まりし、漁期外でも越年仕事のため30人程度は常住していたと云われております。建網^{とう}15ヵ統～18ヵ統を営んだ田中漁場の漁夫は1ヵ統35～40人位でしたので、鯉漁期には、地元の手間取り等を数えるとその使用人は大変な人数となりました。

建物創建者

当時鯉大尽と呼ばれた積丹地方有数の親方・田中福松氏は、青森県東津軽郡蓬田村在住の田中吉兵衛の二男として生まれ、17歳の時、1854年(安政元年)、叔父の武井忠兵衛(積丹の古宇場所支配人)を頼り漁夫として来道しましたが、程なく独立して、鯉刺網から次第に大規模な建網漁業(定置漁業)へ移行し、その後の漁獲は実に1万石(200万貫、7500トン)ともいわれました。



写真提供:小樽市総合博物館

▲ニシンの網おこしの様子

構造

一部2階建てで総面積は611.9㎡(185.1坪)を誇り、北陸・東北地方の切妻造の民家様式が採用されております。

特徴としては、大屋根中央に形良く乗っている入母屋造の煙出し、伽藍調を帯びた大屋根の庇、正面玄関の円形屋根と直線の小庇との対象、脇玄関の庇を支えている象鼻^{ぞうはな}等があり、いずれも民家には珍しい建築様式となっています。

建築用材

主として、「たも・せん・とど松」等の道産原木や弁財船で東北地方から取り寄せた檜等約3000石(540トン)が使われております。仮に、この材料を使用して30坪の家を建てるとすると20軒分建てることが可能です。いかに木材が豊富な時代とはいえ、長大な材木をふんだんに使ったその時代の鯉場親方の豪放さに驚かされます。



▲鯉御殿内部の様子

